

Title	「天文用語に関する私見」をよみて
Author(s)	篠崎, 長之
Citation	天界 = The heavens (1934), 14(158): 298-298
Issue Date	1934-05-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/165534">http://hdl.handle.net/2433/165534</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 「天文用語に関する私見」をよみて

高 知 篠 崎 長 之

學術語が一般に不統一亂雜であるのは實に遺憾に 耐へない、この時山本先生が本當の日本語、正しい日本語を學術語にも活かしたいとの 御希望を持たれることに對して双手を舉げて賛成致します、しかし 具體的に一語一語に就いては先生と一致し難い所があります。

Spectrum, Type などはやはりスペクトル, タイプとするに賛成致します。譯語が多少拙であつても、長く使はれて馴れてゐるものは却つて 便利であるから之を固執したいと存じます。どんなによい譯語を造つて見た處で 學術が進歩するから、文字とその内容とは違つて來るのが普通です。其の時は文字(又は言葉)をそのまゝにして、内容が一致する様に定義を變へればよいと存じます。そうした方が便利であらうと思ひます。この意味で“Nebula”は長い間「星雲」とされて來たのだからやはり「星雲」のまゝにして置き「星霧」としない方が通りがよいと存じます。「星雲」を外の意味に用ひると 混亂の虞もあります。Star-Cloud に對して何かよい譯語を與へれば 此の問題は解決されるのではないでせうか、餘りよいとは思ひませんが 假りに「雲の様に見える星」と意味で「くも星」としては如何でせうか、「星雲」は「星界の雲」といふ意味であると見れば Nebula に少し近い意味を持つように思はれます。

「變光星」を「變星」とする理由がよく解りませんが“Variable”は確かに「光」といふ意を少しも含んではゐませんが、寧ろ Variable の次に光とか何とかいふものが省かれてゐるものと 解釋した方がよいのではないでせうか? 「變光星」も馴れたのですから、其のまゝにして置く方がよからうと存じます。支那で變星といつても吾々はそれを考へるには及ばないと思ひます、「科學」は「化學」と紛らはしいから「理學」がよいと思ひます。「變星」も化學書によく見る「變成」といふ語と發音が似てゐるのは缺點でございませう、「隕石」も 馴れたものですから「隕星」とするには賛成出来ません、「隕石」は「石質隕石」で我慢したいと存じます。これが少し長過ぎるといふのでしたら 他によい新語を作ればよいと存じます。それをせず既に定つて世に通用してゐるものを破るのはどうかと存じます。例へば「座標」といふ語は餘り適譯でないことは 譯者藤澤博士から直接拜聴したことがあります、今適譯を造つて發表しても却つて通じ難いことにならないでせうか、譯語の出來た當座にあつては 適譯なりや否やは多少問題となりませうが、「馴れて終へば同じではないでせうか、それで多少無理があつてもなるべく日本語で譯語を作りたいと存じます、確かに「リウセイ」よりも「流れ星」の方が優つてゐます。